モルドヴァ共和国の歴史教科書における現代史

中島　崇文

はじめに

モルドヴァ共和国はウクライナとルーマニアの間に存在する小国である。2014年の国勢調査によれば、同国の人口は280万4801人であり、そのうち「モルドヴァ人」（moldoveni）は206万8058人（75.1パーセント）を占めているのに対し、「ルーマニア人」（români）は19万2800人（7.0パーセント）に過ぎない[1]。他方、同国では言語学者が全国各地の全市町村の人口などをまとめたガイドブックを発行しているが、同書においてはmoldoveniという言葉は全く用いられておらず、もっぱらromâniと記載されている[2]。こうした状況を反映して、一見すると奇妙であるが、同国の書店で目にする大半の歴史教科書の書名にはIstoria românilor（ルーマニア人の歴史）という言葉が含まれている。

このように他の国々とは状況が異なるモルドヴァ共和国の歴史教科書に関しては、21世紀に入る頃から国外でも関心がもたれるようになっており、ミュンヘン大学のヴィム・ファン・モイルスが概要をまとめたものが2003年に活字となっている[3]。また、ゲオルク・エッカート国際歴史教科書研究所（Georg Eckert Institute for International Textbook Research）で研究活動に従事したシュテファン・イーリヒもモルドヴァ共和国の歴史教科書の分析に取り組んでおり、その成果の一部は2008年に邦訳されているが、その中でモルドヴァ主義とルーマニア主義の対立関係が述べられている[4]。より最近の研究成果といえば、セルジュ・ムステアツァがウクライナ、ルーマニアと合わせてモルドヴァの歴史教科書をめぐる2012年頃までの状況について2017年に整理したものがある[5]。

---

[1] http://recensamant.statistica.md/ro（2018年10月28日閲覧）

[2] Anatol Eremia, Viorica Răileanu, Academia de Ştiinţe a Moldovei, Institutul de Filologie, *Localităţile Republicii Moldova: Ghid informativ documentar*, Chişinău, Grupul Editorial Litera, 2009.

[3] Wim van Meurs, *History Texbooks in Moldova,* Strasbourg, Council of Europe, 2003.

[4] シュテファン・イーリヒ「第12章　歴史と究極の真実の再発見―モルドヴァにおける歴史、教科書、アイデンティティと政治―」（田崎恵子訳）、「第19章　ナショナリズムの達成vs. ナショナリズムの維持―モルドヴァの事例とナショナリズム理論―」（鈴木健太訳）柴宜弘編著『バルカン史と歴史教育―「地域史」とアイデンティティの再構築―』明石書店、2008年、170 ～ 187、354 ～ 393頁。

[5] Sergiu Musteaţă, *About Us and Our Neighbours: History Textbooks in the Republic of Moldova, Romania and Ukraine,* Eckert. Dossiers 7 (2017) .（http://repository.gei.de/handle/11428/213（2018年10月28日閲覧））

本稿の筆者はルーマニアの歴史教科書に関しては2008年にまとめている[6]。モルドヴァに関しては、社会主義期の歴史学全般の流れについては整理したことがある[7]ものの、歴史教科書についてはまとめる機会がなかったので、この度、これに取り組むこととしたい[8]。本稿の執筆に着手した2018年のちょうど百年前である1918年に現代史が始まるとみなされることが多いということもあり、本稿では独立以降のモルドヴァ共和国において出版された歴史教科書の中で現代史[9]はどのように叙述されているのかということを重点的に取り上げることとする[10]。その際、上記の先行研究とは異なり、三つの時期に区切って叙述し、1991年以降の大きな流れを理解しやすいようにするものとする。また、先行研究では十分に触れるに至っていない近年の状況により重きを置くこととする。なお、紙幅の制約もあり、モルドヴァ共和国内の未承認国家であるトランスニストリア（沿ドニエストル共和国）の歴史教科書については扱わない。

1.『ルーマニア人の歴史』と『世界史』とが別々に記述されていた時期（～ 2001年）

（1）政治状況

1940年以来、モルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国（Молда́вская Сове́тская Социалисти́ческая Респу́блика）はソ連を構成する共和国の一部として半世紀の歩みを続けてきたが、1991年5月23日、国名はモルドヴァ共和国（Republica Moldova）となり、同年8月27日には独立宣言がなされ、新たな時代に入った。

独立の前年の1990年9月3日付の法律第250-12号により、モルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国大統領のポストが設置されていたが[11]、初代大統領となったのはミルチャ・スネグル（Mircea Snegur）であった。彼は独立以降も1996年12月1日に至るまでの6年余、モルドヴァ共和国大統領であったが、モルドヴァ共和国の再生・和解党（Partidul Renaşterii şi Concilierii din Republica Moldova）党首も務めていた[12]。

第2代の大統領になったのはモルドヴァ農業民主党（Partidul Democrat Agrar din Moldova）の国会議員であったペトル・ルチンスキ（Petru Lucinschi）であった。彼は1996年12月1日から2001年4月4日まで大統領職を務めた[13]。ルチンスキはソ連時代から

---

[6] 中島崇文「移行期におけるルーマニアの歴史教科書」『バルカン諸国歴史教科書の比較研究』（科学研究費補助金基盤研究B研究成果報告書）東京大学、2008年、31 ～ 46頁。

[7] 中島崇文「社会主義期モルドヴァの歴史学」『社会主義期東欧ロシアの歴史学―歴史学雑誌・機関・研究―』（科学研究費補助金基盤研究A「社会主義期東欧ロシアの歴史学」成果報告書）、大阪教育大学、2018年、32 ～ 37頁。

[8] 珍しいことにモルドヴァ共和国の音楽の教科書に関しては日本で論文が一つ執筆されている（城元智子「旧ソ連モルドヴァ共和国の音楽教科書」『音楽教育実践ジャーナル』第9巻第2号、日本音楽教育学会、2012年、103 ～ 109頁）。

[9] 現代史を学ぶのは4年生の他、9年生と12年生であるので、これらの学年向けの教科書が主な分析対象となる。

[10] 現代史については、近隣諸国の中ではクロアチアに関してはまとめられているものがある（石田信一「クロアチアにおける学習指導要領と現代史教育」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』第4号、2006年、50 ～ 61頁）。

[11] http://www.presedinte.md/rom/presidency（2018年10月29日閲覧）

[12] http://www.presedinte.md/rom/mircea-snegur（同日閲覧）

[13] http://www.presedinte.md/rom/petru-lucinschi（同日閲覧）

共産党で活動してきており、ゴルバチョフによって促された「人間の顔をした」ノーメンクラトゥーラ[14]とも評されている。

(2) 歴史教科書の概要

独立国家としての初期は、1992年にトランスニストリア紛争が勃発し、また、かつてソ連への依存から脱する過程も順調ではなく、1990年代には経済状況も深刻なものとなった。そのため、独立以降の教科書の出版も困難であり、ソ連時代の教科書からの書き換えも時間がかかるものとなった。ようやく1998年9月28日にモルドヴァ教育科学省によって認可された4年生用の歴史教科書は世界銀行の融資を受けて出版されている。これには『ルーマニア人の歴史のページ』というタイトルがつけられている[15]。

同国においては4年生では古代から現代までの大きな歴史の流れを学ぶようなカリキュラムになっているが、教科書の題目の通り、一貫して「ルーマニア人」が主語として記述されている。同教科書では「ダキア人とローマ人の混血からルーマニア民族が生まれた」(p.44) と明記されている。1475年のモルドヴァ公国のシュテファン大公によるヴァスルイでの戦いの箇所ではmoldoveni (p.64-65) という記載はあるものの、それは例外的であり、「モルドヴァ人」という用語はまず見当たらない。但し、写真1が示す通り、表紙の図版はシュテファン大公やブコヴィナの修道院など、モルドヴァで有名なものばかりがモチーフとして採用されている。

写真1　4年生用『ルーマニア人の歴史のファイル』の表紙
(2018年11月1日、中島撮影)

[14] http://www.fundatia-aleg.ro/Article11049.phtml (同日閲覧)

[15] Pavel Cerbuşcă, Gheorghe Gonţa, Valentina Haheu, Nina Petrovschi, *File din Istoria Românilor: Manual pentru clasa a IV-a* , Chişinău, Editura Ştiinţa-Cartier, 1999.

現代史に関して言えば、1918年のベッサラビア、ブコヴィナ、トランシルヴァニアのルーマニアへの併合については、ルーマニア史で一般的であるようにMarea Unire（大統一）であるとされ、România Mare（大ルーマニア）という用語も用いられている（p.104-105）。肝心の1924年のモルダヴィア・ソヴィエト社会主義自治共和国の創設については言及されていないが、1940年にボリシェヴィキによってベッサラビアと北ブコヴィナが併合されたということは記載されている（p.108）。

第二次世界大戦後には、1946 ～ 1947年の干ばつと飢饉で何十万もの人々が亡くなり、1949年7月5日から6日にかけての夜に1万人もの農民の家族がシベリアに追放されたことが記され（p.108-110）、「我が民族の歴史における悲劇のページ」（p.108）と評されている。社会主義期については、それ以外には「1990年代初頭まで、モルドヴァはソ連を構成する共和国の一つである。それはソヴィエト帝国の一つの地方であり、諸権利において制限されていた」（p.112）と記載されるにとどまっているが、いずれにせよソ連時代については否定的に紹介されていると言える。

1990年代については、出版時点でまだ同年代が終わっていなかったということもあるが、1991年8月27日、独立宣言がなされ、独立が世界の大半の国々によって承認され、国連、欧州審議会に加盟したことが記載され（p.112-114）、1994年7月29日に憲法が国会で採択されたことが言及されているに過ぎない（p.116）。

独立以降の歴史教科書の中には、そもそも5人の著者のうち4人がルーマニア国内の大学や高校の教員であり、モルドヴァ国内の大学の教員1名のみが執筆しているという、12年生用の教科書も2001年7月23日付でモルドヴァ共和国の教育大臣によって認可されている[16]。

同教科書の構成についていえば、10の章のうち、モルドヴァないしはトランスニストリアのみに関する章は3つに過ぎない。第二次世界大戦後より1980年代までについては、モルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国に関する第7章は8頁分しか配分されていないのに対し、社会主義時代のルーマニアに関する第8章は37頁分もある。執筆者の大半がルーマニアの歴史家であることによるものと考えられるが、偏っていると言わざるをえない。写真2のように、表紙の下部に載せられている国旗も実はモルドヴァ共和国のものではなく、ルーマニアの三色旗なのである。

また、1989年時にはルーマニア人が共和国の人口の約3分の2である64.5パーセントを占めていると記述されている（p.151）。但し、第9章は「現在のルーマニア（1989 ～ 2001年）」（11頁分）であるのに対し、第10章の「現在のモルドヴァ共和国（1985 ～ 2001年）」（19頁分）はゴルバチョフが登場した1985年からの記述となっており、分量は逆に多くなっている。

---

[16] Ioan Scurtu, Ion Şişcanu, Marian Curculescu, Constantin Dincă, Aurel Constantin Soare, *Istoria românilor. Epoca contemporană: Manual pentru clasa a XII-a,* Chişinău, Editura Prut Internațional, 2001.

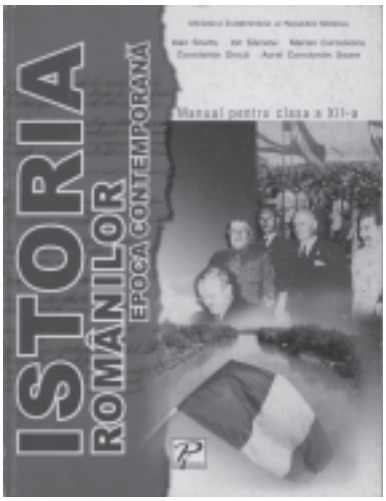

写真2　12年生用『ルーマニア人の歴史：現代』の表紙
（2018年11月1日、中島撮影）

モルドヴァの歴史家が中心に執筆したものとしては、モルドヴァ科学アカデミー附属歴史学研究所のニコラエ・エンチウらによる12年生用の教科書が1999年のカリキュラムに基づいて発行されているが、その章立ては以下の通りである[17]。

第１章　両大戦間期におけるルーマニア国家の政治生活の発展
第２章　1918 ～ 1940年のルーマニアにおける経済・社会生活
第３章　両大戦間期の国際情勢におけるルーマニア
第４章　両大戦間期における文化と科学
第５章　モルドヴァ・ソヴィエト社会主義自治共和国における社会・政治生活（1924 ～ 1940年）
第６章　第二次世界大戦におけるルーマニアとベッサラビア
第７章　モルドヴァ・ソヴィエト社会主義共和国における共産主義体制の再設置と強化
第８章　共産主義体制期におけるルーマニア（1944 ～ 1989年）
第９章　1989年12月以降のルーマニア
第10章　現在のモルドヴァ共和国

今日のモルドヴァ共和国の国土は1940年まではルーマニア王国の一部であったために、必然的に現代史の教科書の前半部分はほぼルーマニア史とならざるをえないが、題

[17] Nicolae Enciu, *Istoria românilor. Epoca contemporană: Manual pentru clasa a XII-a,* Chişinău, Editura Civitas, 2005.

目が『ルーマニア人の歴史』であるために、モルドヴァとは別個の国家であった共産主義時代のルーマニアについても生徒はかなりの分量で学ぶことが求められており、実質的には自国史というよりも二国史になっていると言える。

21世紀初頭までは、これとは別に『世界史』の教科書も発行されていたが、章立てはテーマごとに設定されており、かなり異なっている。1999年のカリキュラムに基づいて2001年に初版が日の目を見た、2001年のセルジュ・ナザリアが執筆した12年生用の『現代世界史』は以下のように構成されている[18]。

第１章　20世紀における経済と科学技術の進歩
第２章　民主的な国々と全体主義体制
第３章　社会生活と生活様式
第４章　現象としての20世紀の戦争
第５章　20世紀前半における国際関係
第６章　20世紀後半における国際関係
第７章　国際機関と世界の中でのそれらの役割
第８章　植民地システムの解体。脱植民地化した国々の問題
第９章　現代における科学や文化の発展
第10章　20世紀のグローバルな問題

写真3　12年生用『世界史：現代』の表紙
（2018年11月1日、中島撮影）

[18] Sergiu Nazaria, *Istoria universală contemporană (1914-2003) : Manual pentru clasa a XII-a de liceu,* Chişinău, Editura Civitas, 2003.

モルドヴァについては一箇所、小さく「ケース・スタディー：CISの枠内でのモルドヴァ共和国の経済協力」（p.95）記載されているのみであり、世界史が自国史とはっきり分けて叙述されていることが印象的である。なお、同箇所では「CISは旧ソ連圏へのモスクワの影響力の行使の梃子である」と記述されており、CISについては否定的なものとして生徒に理解させようとするような形になっている。

なお、この時期において『世界史・ルーマニア人の歴史』と題する教科書も一部の学年に関しては出版されている。しかし、中をめくってみると、冊子の前半が世界史、後半がルーマニア人の歴史といった具合に、やはり別々に記述されていることが伺える[19]。

2. 共産党政権が単一の『歴史』の出版を試みた時期（2001 ～ 2009年）

（1）政治状況

2000年に入ると、憲法が一部改正され、第78条第1項によりモルドヴァ共和国大統領は国会によって選出されることとなった[20]。その結果、1994年よりモルドヴァ共和国共産党（Partidul Comuniştilor din Republica Moldova）中央委員会第一書記となっていたヴラディミル・ヴォローニン（Vladimir Voronin）が2001年4月4日、大統領に選出されたが、彼は4年後の2005年4月4日に再選され[21]、結局、2009年9月11日まで大統領を務めることとなり[22]、この8年間はモルドヴァ共和国共産党が政権を担った。

ヴォローニン大統領は2001年4月16 ～ 17日に早速、モスクワを訪問しており、共産党の指導層がロシアとの関係強化に乗り出したことは明らかであった。共産党が着手した政策の中には、それまではルーマニアと同じ県（județ）に区分されていた国土が再び、ソ連時代のように郡（raion）に再編されるというものもあった[23]。

（2）歴史教科書の概要

このような中で共産党政権は歴史教科書の大幅な改変を試みることとなった。その結果、2006年に「ルーマニア人の歴史」は初めて学校教育から除外されることになった[24]。同年8月4日付の教育・青年省令で出版が認可されたものが、写真4の教科書である。

---

[19] Gheorghe Gonța, Pavel Parasca, Pavel Cerbușcă, Valentina Haheu, Nina Petrovschi, *Istoria universală. Istoria românilor: Manual pentru clasa a V-a,* Chișinău, Editua Știința, 2000.

[20] http://lex.justice.md/document_rom.php?id=77DAC2CD:869480F5（2018年11月1日閲覧）

[21] http://www.presedinte.md/rom/presidency（2018年10月29日閲覧）

[22] http://www.presedinte.md/rom/biografia-presedintelui-vladimir-voronin（同日閲覧）

[23] Dorin Cimpoeșu, *Regimul post-totalitar din Republica Moldova (1990-2012)* , Târgoviște, Editura Cetatea de Scaun, 2012, p.207-208.

[24] https://www.rfi.ro/social-49660-manualul-de-istorie-modificat-republica-moldova（2018年10月29日閲覧）

写真4　9年生用『歴史』の表紙（2018年11月1日、中島撮影）

なお、本稿の筆者は長年、同教科書を探していたが、首都キシナウ市内の書店にも売られておらず、これはテレネシュティ郡カザネシュティ小中学校の教員より譲っていただいて入手したものである。評判が芳しくなかったために、結果として十分に流通しなかったものと考えられる。

当時のマス・メディアでは「統合史」（istorie intergrată）の教科書が出版されるということで議論が巻き起こされていたが、実際の教科書名はただ単に『歴史』（*Istorie*）と称するものになっている。いずれにせよ、それ以前の教科書とは異なり、ルーマニア人の歴史と世界史が一冊の教科書にまとめられて叙述されている。

序文は学校カリキュラムによれば同教科書が68時間で学ぶものとされていることを記載している。また、欧州審議会や2002年4月14 ～ 18日にキシナウでユーロクリオ（欧州歴史教員協会）の代表者たちによって開催された「モルドヴァ共和国における歴史の教え方」と称するセミナーの勧告に基づいたものであり、国民史を否定することなく、統合欧州の市民になるものであるということも述べられている。さらに、世界史と祖国の歴史（モルドヴァ共和国）の学習時間は教科書の中では50対50という割合であることが提案されているという[25]。この序文では「ルーマニア人」という言葉が全く使われておらず、従来の教科書とはかなり異なるスタンスがとられている。

[25] Sergiu Nazaria, Alexandru Roman, Mihai Sprînceană, Sergiu Albu-Machedon, Anton Dumbravă, Ludmila Barbus, *Istorie. Epoca contemporană: Manual pentru clasa a IX-a,* Chișinău, Editura Cartea Moldovei, 2006, p.3.

全207頁から成る同教科書の章立ては以下のようになっている。

第1章　世界の国々の政治生活
第2章　20 ～ 21世紀における世界の国々の経済発展
第3章　社会生活の発展
第4章　20世紀と21世紀初頭における国際関係
第5章　現代における文化と科学

各章はさらに各節に区分されており、その中には「1944 ～ 2004年の時期におけるルーマニアの政治の展開」と題する第1章第20節のようにルーマニアに関する記載もないわけではないが、全体としては以前の教科書と比べ、大幅に少なくなっている。それだけではなく、反ルーマニア的記述が顕著である。まず第1章の冒頭で1934年6月17日に政治家のパンテリモン・ハリッパ（Pantelimon Halippa）が述べた以下の言葉が引用されている。

> （ルーマニアとの）統一の時期から今日に至るまでベッサラビアのためになされたことは極めて少ない。プルート川の向こう側の同胞に訴えると、彼らはもっと待つようにと我々に助言する。ロシア帝国時代に我々には学校や病院がなかった。しかし、統一の後も進歩の跡が一つさえ見られない。ルーマニア政府は我々が必要としているものに関心を持たない。我々に背を向けるのである。何らかの用件を解決するために首都にやって来ると毎回、「待ちなさい」と言われるのである[26]。

この他にも、第1章第1節「モルドヴァ民主共和国の運命」の中で、1918年初頭にルーマニア軍がベッサラビアに進出したことについて、「外国の軍隊、そして特にルーマニアの軍隊を導くことに対して大衆が抗議するという雰囲気の中で、国家評議会の指導者たちはモルドヴァ民主共和国が引き続き、ロシア連邦の枠内で存在することを弁護すると公に宣言することを余儀なくされた」（p.18）と記されている。20頁にもルーマニア軍に関し、「外国の軍隊の占領」（ocupație militară străină）という語句が用いられ、かつ、「すなわちベッサラビアの住民の圧倒的大多数はこの（ルーマニアとの）統一に反対であったが、残酷なテロルという状況の中ではいかなる抗議行動も死刑に処せられたのである」とさえ記載されている。同教科書を本稿の筆者に譲って下さった教員はこれら3箇所の記述をよほど気に入らなかったらしく、鉛筆で下線を引いている。これは従来の教科書とは正反対の見方となっているのである。

[26] *Ibidem,* p.5.

2009年に出版された第2版では、さすがに冒頭のあからさまに反ルーマニア的な文面は削除されているが、本文の中では「ルーマニアの枠内に編入された後もベッサラビアは最も遅れた地域であり続ける。ルーマニア王国の役人たちの侮辱的な言動は、住民の搾取の制度の確立をもたらした。(中略)結論:少数の人たちの贅沢な生活と大多数の人々の貧困、社会的不平等といった、ルーマニア社会の両極化は両大戦期のルーマニアにおいて絶えず見られる現象であった」[27]といった具合に、ルーマニアについては依然として明らかに否定的な叙述がなされている。表紙の図柄にもグローバルなモチーフしか描かれておらず、内容も全体としては世界史主体の構成になっており、モルドヴァについても断片的に記載されるにとどまっていると言える。

3. 折衷案として『ルーマニア人と世界の歴史』が出版される時期（2009年～）

（1）政治状況

2009年4月5日には総選挙が実施され、共産党は国会の全101議席のうち60議席を獲得した[28]が、大統領の選出に必要な5分の3には至らず、次期大統領が選出されないという事態に陥った。そこで同年7月29日に再度、総選挙が実施され、共産党は48議席、「我がモルドヴァ」同盟（Alianţa “Moldova Noastră”）は7議席、自由党（Partidul Liberal）は15議席、モルドヴァ自由民主党（Partidul Liberal Democrat din Moldova）は18議席、モルドヴァ民主党（Partidul Democrat din Moldova）は13議席を獲得した[29]。共産党は今回も単独で大統領を選出する議席数を獲得できなかった。残りの4つの政党は欧州統合同盟（Alianța pentru Integrare Europeană）という連立を形成したものの、やはり大統領選出に必要な61議席には達しなかった。しかしながら、1998年より自由党党首を務めていたミハイ・ギンプ（Mihai Ghimpu）を国会議長に選出させることに成功し、彼は2009年9月11日以降、モルドヴァ共和国大統領代行を務めた[30]。

国会が大統領を選出できない結果となったことから、2010年11月28日に再度、総選挙が行われ、その結果、共産党は42議席、モルドヴァ自由民主党は32議席、モルドヴァ民主党は5議席、自由党は12議席を獲得し、依然として国会が大統領を自ら選出することはできない結果となったので、2009年よりモルドヴァ民主党党首を務めており、この度、国会議長に選出されたマリアン・ルプー（Marian Lupu）が2010年12月からモルドヴァ共和国大統領代行を務めるに至った[31]。

---

[27] Sergiu Nazaria, Alexandru Roman, Mihai Sprînceană, Sergiu, Raţa, Anatol Dubrovschi, Ludmila Barbus, *Istorie. Epoca contemporană: Manual pentru clasa a XII-a,* Ed.a 2-a, Chișinău, Editura Cartea Moldovei, 2009, p.33-34.

[28] http://www.e-democracy.md/elections/parliamentary/2009/results/（2018年11月1日閲覧）

[29] http://www.e-democracy.md/elections/parliamentary/20092/results/（同日閲覧）

[30] http://www.presedinte.md/rom/biografia-presedintelui-interimar-mihai-ghimpu（2018年10月29日閲覧）

[31] http://www.presedinte.md/rom/biografia-presedintelui-interimar-marian-lupu（同日閲覧）

正規の大統領が不在という状況が2年以上も続き、こうした膠着状況を打開すべく、無所属で最高裁判所長官であったニコラエ・ティモフティ（Nicolae Timofti）が候補者ということで大半の国会議員の理解がようやく得られ、彼は2012年3月16日に国会によってモルドヴァ共和国大統領に選ばれた[32]。

その後、今度は国民の直接投票の結果、2016年11月13日、イゴル・ドドン（Igor Dodon）がモルドヴァ共和国大統領に選ばれた。彼はかつて共産党員であったが、モルドヴァ共和国社会党（Partidul Socialiștilor din Republica Moldova）に移り、2011年11月より同党の党首を務めていた[33]。ドドンは親露的な左派であるが、2009年以降は一貫して欧州統合路線の中道右派が政権を担っており、彼の実質的な権限は限られているといえる[34]。

(2) 歴史教科書の概要

①教育省による決定とその反響

以上のような状況において2009年以降は再び歴史教科書の見直しが行われている。共産党当局によって編集された統合史の教科書は、歴史の真実を偽って示すものだとして、教員のみならず、研究者や市民社会からも激しく非難されていた。それらは、例えば、強制された集団化やソ連時代の追放をある程度、正当化することを試みるものであった。当該教科書は学校に届くには至らず、2009年に共産党が政権から離れると、新しい政権は別の歴史の教科書を編纂しようとすることとなった[35]。

こうして2011年秋、ミハイル・シュレアフティツキ（Mihail Şleahtiţchi）大臣が統括する教育省は、25人の委員から成る歴史家の委員会の創設に着手したが、この委員会は、歴史はいくつの科目で教えられるべきか、すなわち一つか二つか、そして、科目名はただ単に“Istorie”（「歴史」）とすべきか、あるいは“Românilor”（「ルーマニア人の」）という名称も加えるべきか、という主要な二点について表明すべきとされていた。結局、委員会は、歴史のディシプリンには“Istoria Românilor şi Universală”（「ルーマニア人と世界の歴史」）と称する科目一つにすべきであるという結論に達した[36]。

こうした歴史の名称の見直しはモルドヴァ共和国の教員によって歓迎されている。2012年秋から、生徒たちは*Istoria Românilor și Universală*（『ルーマニア人と世界の歴史』）と称する新しい教科書で学ぶことになるのであった。教師たちは、上記の委員会の提言に基づき、学習科目を“Istoria”（歴史）から“Istoria Românilor şi Universală”（ルー

---

[32] http://www.presedinte.md/rom/biografia-presedintelui-nicolae-timofti（同日閲覧）

[33] http://www.presedinte.md/rom/biography（同日閲覧）

[34] 2010年よりモルドヴァ民主党（PDM）党員であるパヴェル・フィリップ（Pavel Filip）が2016年より首相を務めている（https://gov.md/ro/content/pavel-filip-prim-ministru（同日閲覧））。

[35] Corneliu Rusnac, “Manualul de Istorie, modificat în Republica Moldova”, RFI România, 16 august 2011（https://www.rfi.ro/social-49660-manualul-de-istorie-modificat-republica-moldova（同日閲覧））

[36] Igor Caşu, “O replică detractorilor”, *Adevărul,* 22 martie 2012（https://adevarul.ro/moldova/actualitate/o-replica-detractorilor-1_50aee3f47c42d5a663a17e5c/index.html（同日閲覧））

マニア人と世界の歴史）へと変更するという、シュレアフティツキ教育大臣の決定を支持している。

写真5　4年生用『ルーマニア人と世界の歴史』（科学出版社）の表紙
（2018年11月1日、中島撮影）

歴史の教員たちは、教育大臣の介入は歓迎すべきものであり、それは教員のみならず生徒をも助けることになると公言している。「我々はIstoria integrată（統合史）には反対だったのであり、それで生徒たちを教えたことは一度もありません。新しい教科書を待っており、これは我が国で最も優れた学者たちによって編集されることを望んでいます」と国内の北西端のブリチェニ（Briceni）郡の教育局長であり、歴史の教員でもあるヴィタリエ・シュティルブ（Vitalie Ştirbu）は述べたという[37]。

国内の南西端に近いカフル（Cahul）でも教師たちは安堵している。郡庁所在地の「ミハイ・エミネスク」（Mihai Eminescu）高校の歴史の教員であるオクサナ・ペルジュ（Oxana Perju）は、教科書と学校カリキュラムの間の不一致には飽き飽きしたと述べている。彼女は「ずっと前から、学校カリキュラムと合致する教科書が使えることを待っていました」と述べている。「私たちは四つのテキストをめくらなければならなくなっています。加えて、毎日のように生徒たちから「今度はどの本で学べばいいのでしょうか？」という同じ質問が生徒たちから寄せられています」と彼女は語っており、教育現場では混乱していた状況が伺える。

[37] "Redenumirea Istoriei, salutată de profesorii din Republica Moldova", *Adevărul,* 20 martie 2012（https://adevarul.ro/moldova/social/redenumirea-istoriei-salutata-profesorii-republica-moldova-1_50aeeb6c7c42d5a663a1ac08/index.html（2018年10月27日閲覧））

同時に、教師たちは、教科書の名称の置換えは、授業の内容の本質を変えることはないだろうと言及している。「重要なのは、教科書の名称の再変更ではなく、その科目自体、すなわち歴史的事件やそれらが起こった経過に対する教師や生徒たちの態度です」というのが、キシナウの「リヴィウ・デレアヌ」（Liviu Deleanu）高校のアラ・ゲルマン（Ala Gherman）教頭の意見である。

シュレアフティツキ教育大臣の指示によって、2012年までは世界史が教科書の情報量の50パーセント、ルーマニア人の歴史が45パーセントを占めていたが、9月1日からはルーマニア人の歴史が55パーセント、世界史が40パーセント、残りの5パーセントが地元の歴史に戻ることとなった。「世界史はより広い章を成しているが、ルーマニア人の空間についてより多くを学ぶことが正しい」と首都の歴史の教員であるタティアナ・オヴディン（Tatiana Ovdin）は述べている。

上記の委員会の内部も最初から一枚岩であったわけではない。当初、はっきり異なる二つの意見が存在していた。一方は、一昔前にそうであったようにIstoria Românilor（ルーマニア人の歴史）とIstoria Universală（世界史）という二つの異なる科目を要求していたのに対し、他方は、社会の中で騒ぎを起こさないようにし、政治家の間に意見の相違を生み出さないように、curs de istorie integrat（統合史）の科目一つにすることを擁護していた。

大臣は妥協をすることを試み、Istoria Românilor şi Istoria Universală（ルーマニア人の歴史と世界史）と称することになる単一の科目にすることを決定した、とモルドヴァ歴史家協会会長のゲオルゲ・ネグル（Gheorghe Negru）は述べている[38]。

②ドドン現大統領による介入と歴史教員の反発

しかしながら、これで一件落着とはなっておらず、現在も大統領はこの点に関し、歴史家とは対立している。

2017年1月、ドドン大統領はモルドヴァ共和国の教育システムからルーマニア人の歴史に関する教科書を回収することを意図していることを表明した。彼は別のこと、すなわち*Istoria Moldovei*（『モルドヴァ史』）の新版を提案しているが、それはモスクワの国際関係研究所で公に提示されたものである。

ドドン大統領は、モルドヴァ共和国においてルーマニア史が教えられていることに不満を抱いている。国際関係研究所で、彼は3巻本の新しい*Istoria Moldovei*を紹介し、この教科書がモルドヴァ共和国の学校で学ばれるよう、あらゆる努力をすることを約束した。この3巻本は2016年末に出版され、シュテファン大公から現代までのモルドヴァの歴史を紹介している。キシナウの一連の歴史家たちが推し進めるモルドヴァ主義

[38] "Redenumirea Istoriei, salutată de profesorii din Republica Moldova", *Adevărul*, 20 martie 2012（https://adevarul.ro/moldova/social/redenumirea-istoriei-salutata-profesorii-republica-moldova-1_50aeeb6c7c42d5a663a1ac08/index.html（同日閲覧））

（moldovenism）の考えを支持するテーゼや概念がある。ドドンはプルート川左岸の地域のルーマニア化（românizare）を恐れているという。

ドドンは「5、6、7年が過ぎ去り、我々の子供たちが学校を卒業し、「お父さんは年取ってしまい、もう理解できないでしょう。僕たちの歴史や言語はルーマニアのものです」と口にすることでしょう。これを避けなければなりません。簡単ではないことはよくわかっています。抗議もあることでしょう。しかし政治的な意思が必要とされているのです」と述べている。それにもかかわらず、彼はルーマニアとの友好関係を望んでおり、ルーマニアの領土の一部をモルドヴァに返還することを求める考えはないとも主張している[39]。

ドドン大統領は同年3月にはモルドヴァ共和国政府に、学校の歴史の教科書を入れ替えるよう要請した。彼のイニシアチブは、現在のIstorie Românilor（『ルーマニア人の歴史』）という名称をIstoria Moldovei（『モルドヴァ史』）に置き換えるというものであるが、これは「大衆を分断する目的のある逸脱であり、政治的駆け引き」であると一部の歴史家や教員から非難されている。

ドドンはフィリップ首相に宛てた書簡の中で、自らの行動を正当化しているが、学校のカリキュラムの中でIstoria Moldoveiという科目の導入を求めている。同書簡の中で、彼は、ルーマニア人の歴史の学習は、ベッサラビアの人々が自らの過去を知ることを妨げており、モルドヴァ共和国の独立と主権に対してもたらされる侮辱であると主張している。「モルドヴァ共和国が独立国家として存在する25年間において、この国の国民である我々には、モルドヴァ民族とモルドヴァ国家を認めないような概念が押し付けられています」と彼は述べている。同じ文書の中で、ドドン大統領は、「Istoria Moldoveiの科目の導入は、モルドヴァ共和国の国家を強化することに関して絶対に必要であり、Istorie Românilorと称する科目はモルドヴァ国家の将来に関する緊張と不確かさの状態を社会の中に保持している」とも記している。

これに対し、モルドヴァ科学アカデミーの高等学校のユリエ・クリステア（Iurie Cristea）は、この新しい科目の導入によって生徒たちの知る展望は制限され、「ルーマニア人の歴史」、すなわちルーマニア人の空間の歴史が意味するものよりも研究や学習の範囲をはるかに狭めることになってしまうのではないかと主張している。専門家たちはドドンのイニシアチブを非難し、このような改革は大統領の権限には入らないものであると主張した。また、「ゲオルゲ・アサキ」（Gheorghe Asachi）高校のボリス・ヴォロサトゥイ（Boris Volosatîi）校長は「この問題は、学校カリキュラムや教科書に責任

[39] “Igor Dodon vrea să elimine “Istoria Românilor” din învățământul de peste Prut. “Istoria Moldovei”, în 3 volume, prezentată la Moscova”, Ştirile TVR, 19 ianuarie 2017（http://stiri.tvr.ro/igor-dodon-vrea-sa-elimine----istoria-romanilor----din-inva--amantul-de-peste-prut-----istoria-moldovei-----in-3-volume--prezentata-la-moscova_813609.html#view（同日閲覧））

のある機関が従事しなければならない。私や歴史教員も含む教師たちの意見によれば、「ルーマニア人の歴史」が勉強されるべきという点では意見が一致している」と述べており[40]、真っ向から大統領に反対していると言える。

③現在の歴史教科書の構成とモルドヴァ共和国及びルーマニアに関する記述

共産党政権時以前も『ルーマニア人の歴史』と『世界史』とでは章立てがかなり異なるので一緒にするのは難しいのではという懸念があったが、実際には教科書はどのように構成されているのであろうか。

アドリアン・ドルギ（キシナウ市内の「オリゾント」高校の教員）とアリナ・フェレア（「プロメモリア」社会史研究所准教授）による9年生用教科書『ルーマニア人の歴史及び世界史：現代史』[41]は次のような4章構成となっている。

第1章　1918 ～ 1940年における世界の国々
第2章　現代における国際関係と軍事紛争
第3章　戦後における世界の国々
第4章　戦後におけるルーマニアとモルドヴァ共和国

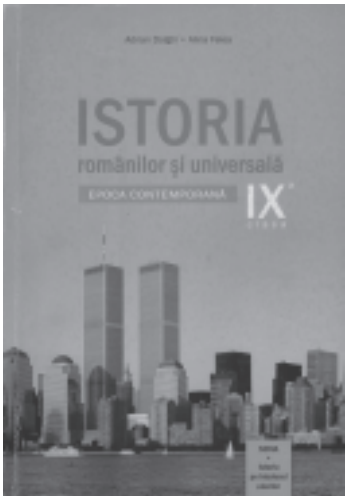

写真6　9年生用『ルーマニア人と世界の歴史：現代』（ABC言葉出版社）の表紙
（2018年11月1日、中島撮影）

[40] “Igor Dodon vrea sa inlocuiasca manualele de “Istorie a romanilor” cu “Istoria Moldovei”. Reactia istoricilor moldoveni”, Ştirile PRO TV, 20 Martie 2017（https://stirileprotv.ro/stiri/international/igor-dodon-vrea-sa-inlocuiasca-manualele-de-istorie-a-romanilor-cu-istoria-moldovei-reactia-istoricilor-moldoveni.html（2018年10月21日閲覧））

[41] Adrian Dolghi, Alina Felea, *Istoria românilor și universală. Epoca contemporană: Manual pentru clasa a IX-a,* Chişinău, Editura Cuvîntul-ABC, 2013, 160p.

第1章と第2章では確かに世界史の中にモルドヴァやルーマニアの歴史が組み込まれた体裁を取っているが、戦後、すなわち第二次世界大戦以降、今日に至るまでの時代については、第3章が世界史、第4章がルーマニア史・モルドヴァ史となっており、融合されていない。しかも、ルーマニアの方が先に述べられており、あたかもルーマニア史が優先されているようである。但し、最後の文化に関する部分については、「第36課　モルドヴァ・ソヴィエト社会主義共和国における文化（1944 ～ 1991年）」が「第37課　ルーマニアにおける文化（1944 ～ 1989年）」よりも先に置かれている。その上、国としてはるかに小さいものの前者には3頁が配分されているのに対し、後者は2頁のみとなっており、かろうじてモルドヴァ重視の方針が垣間見られる。また、前者の末尾にはモルドヴァ人という人工的な民族アイデンティティ創出の試みが非難されており、やはり親ルーマニア的な記載となっている。

次にモルドヴァ国立大学の主要な歴史学の教員であるイゴル・カシュ（Igor Caşu）らによる12年生用『ルーマニア人の歴史及び世界史』[42]を見てみよう。それぞれの章の最後の節は「まとめと理解度の確認」となっているが、それらを省略して章立てを転記すると以下の通りである。ここには章のみならず節も記載している。

第1章　20世紀における政治生活と国際関係

1. 現代における民主的、権威主義的、全体主義的体制
2. 20世紀における国際関係
3. 20世紀の現象としての戦争
4. 両大戦間期におけるルーマニアの政治生活
5. 第二次世界大戦期におけるベッサラビアとルーマニア（1939 ～ 1945年）
6. モルドヴァ・ソヴィエト社会主義共和国と共産主義のルーマニアにおける政治的抑圧

第2章　現代における経済と社会

1. 20世紀における経済の発展
2. 両大戦間期のルーマニアにおける社会と経済（1918 ～ 1940年）
3. モルドヴァ・ソヴィエト社会主義共和国における社会と経済（1940 ～ 1941、1944 ～ 1989年）
4. 共産主義のルーマニアにおける社会と経済（1947 ～ 1989年）
5. 欧州経済統合
6. 現代における科学技術

[42] Igor Caşu, Igor Şarov (coord.) , Virgil Pâslariuc, Flavius Solomon, Pavel Cerbuşcă, *Istoria românilor şi universală: Manual pentru clasa a XII-a,* Chişinău, Editura Cartier, 2013, p.4

第3章　現代世界におけるアイデンティティの問題
1. 両大戦間期におけるヨーロッパの民族の発展と少数民族の状況
2. 両大戦間期のルーマニアにおける民族集団の状況・ベッサラビアの特徴
3. 第二次世界大戦後のヨーロッパにおける民族問題
4. 共産主義期とポスト共産主義期のルーマニアとモルドヴァ共和国における集団的アイデンティティ

第4章　1989年以降のモルドヴァ共和国とルーマニア
1. モルドヴァ・ソヴィエト社会主義共和国の民族解放運動と1989年のルーマニア革命
2. モルドヴァ共和国とルーマニアにおける国内政治
3. モルドヴァ共和国とルーマニアの外交政策：欧州統合
4. モルドヴァ共和国とルーマニアの関係
5. ケース・スタディー：トランスニストリア紛争

第5章　現代世界における文化
1. 現代芸術
2. 大衆文化
3. マス・メディア
4. ケース・スタディー：人類の生活における情報技術の役割

第6章　現代世界のグローバルな諸問題
1. 人口、貧困、栄養失調の問題
2. 健康と文盲撲滅の問題
3. ケース・スタディー：地球温暖化とその結果

上記の9年生用の教科書と異なり、モルドヴァ史とルーマニア史が単独で記載されているのは1989年以降（第4章）に限定されているが、第1章～第3章は時系列ではないため、次の章に進む度に時代を遡ることになり、読者はやや読みにくさを感じるのではないかとも考えられる。

全体として記述内容は以前の教科書に比べるとバランスが取れたものになっているが、やはりルーマニアは概ね好意的に描かれている。例えば、「1941年7月におけるルーマニア軍の再来へのベッサラビア人たちの反応」という小見出しには「忠実な住民は我が軍が入ってくるとほっと一息をついて、住民たちを打ちのめすことを追求していたボリシェヴィキ体制から逃れることができたと神を讃えた」（p.30）というルーマニア国立公文書館所蔵の史料が引用されている。

写真7　12年生用『ルーマニア人と世界の歴史』（地区出版社）の表紙
（2018年11月1日、中島撮影）

④国外への出稼ぎに関する言及

ポスト社会主義期に関しては、経済状況の悪化や国民の生活水準の低下に触れられ、その結果、出稼ぎ者が急増していることも歴史教科書の中で扱われている。2002年に出版された9年生用の『ルーマニア人の歴史』においては「ケース・スタディー：現在のモルドヴァ共和国の国民の生活水準」と称するコラムの中には以下のような記述が見られる。

> モルドヴァ共和国の多くの国民は国外での収入を求めている。労働力に関するアンケート調査によれば、2000年には約14万9千人、すなわち15歳以上の国民の12.4パーセントが国外にいるか、国外での仕事を探している状況である。確認するのが極めて難しい非公式のデータによれば、現在、共和国の国外で仕事に従事しているのは60万人以上である[43]。

また、その下の「国外で働いているモルドヴァ共和国の国民の雇用に関する情報」という小見出しの記述は以下の通りである。

> モルドヴァ人は、23万人の働き手がいるロシア、7万人がいるポルトガル（そのうち2万4千人が合法）、5万人がいるイタリア、1万人ずつがいるスペインとフランス、1万人から1万2千人までの働き手がいるイスラエル、並びにギリシア、トルコ、

[43] Gheorghe Palade, Igor Șarov, *Istoria românilor: Epoca contemporană: Manual pentru clasa a IX-a,* Chișinău, Editura Cartdidact-Reclama, 2002, p.99.

キプロスでの労働市場を好んでいる。（後略）[44]

上記の記述の中では「ルーマニア人」ではなく「モルドヴァ人」という言葉が使われていることに目を引かれるが、2013年に出版された9年生用の『ルーマニア人と世界の歴史』においては、「ルーマニアとモルドヴァ共和国の国外のルーマニア人」という項目があり、その中では以下のように「ルーマニア人」という言葉が用いられており、異なっている。

ルーマニア人のディアスポラはルーマニアとモルドヴァ共和国の国外のルーマニア人の住民全体を指す用語であり、そこには居住国で生まれたルーマニア人のルーツを持つ市民も含まれている。外国のルーマニア人の総数は約1200万人と見積もられている。彼らのうちの最も多くは旧ソ連諸国、西欧（特にスペインやフランス）、北米、南米、オーストラリアやニュージーランドに住んでいる。ルーマニア人の主要なコミュニティーは、ウクライナ、ブルガリア、セルビア、モンテネグロ、ハンガリーといったルーマニアやモルドヴァ共和国の近隣諸国に見られる。ルーマニア人のコミュニティーはオーストリア、アルバニア、ギリシア、マケドニア、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、スペイン、ポルトガル、ドイツ、ルクセンブルク、デンマーク、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、イギリス、アイルランド、キプロス、トルコ、イスラエル、カナダ、米国、ブラジル、メキシコ、ベネズエラ、アルゼンチン、コロンビア、ペルー、オーストラリア、ニュージーランド、旧ソ連諸国、南アフリカに存在する。

無数のルーマニア人は、1989年12月の出来事の後（ルーマニアの場合）、もしくは1990年代（モルドヴァ共和国の場合）に越境している。国外移住の波の主要な特徴は年齢（20 ～ 70歳）と職業（最も多いのは知的職業）において極めて多様である。ルーマニアからの移民にとって、動機は政治的なものであり続ける一方で、モルドヴァ共和国からの移民にとって、動機は市場経済への移行、国の経済状況、生活水準の低下、失業率の増大、実質賃金の減少、悲惨な年金が代表的なものである。移民はモルドヴァ共和国の社会的変容や国民の人生にとって最も重要で最も痛みを伴う現象の一つである。（後略）[45]

「ルーマニア人」が全世界に満遍なく散らばっていることにも驚かされるが、いずれにせよ冒頭で「ルーマニア人のディアスポラ」という言葉が用いられていることに象徴されるように、モルドヴァ共和国からの移民に関しても「ルーマニア人」という括りに

[44] *Ibidem,* p.99
[45] Dolghi, Felea, *op.cit.,* p.150-151.

含まれるような記述となっていることは印象的である。

おわりに

ソ連からの独立以降のモルドヴァ共和国では脱ソ連化が進んで1990年代後半より『世界史』と並行して『ルーマニア人の歴史』が教えられるようになったが、2000年代後半には共産党政権下で両者が統合され、単一の『歴史』という名の教科書が出版されたものの広く流布するには至らず、2010年代には『ルーマニア人の歴史と世界史』という形に落ち着きつつある。このように歴史教科書は政治に振り回される面が多々あり、一時は親モルドヴァ的、親ロシア的な記述がなされたが、再び親ルーマニア的な記述が採用されている。「世界史」と一緒に一冊の教科書に記載されるようになったとはいえ、科目名に「ルーマニア人の歴史」という言葉が含まれているという状況であるため、生徒にとってみれば、依然としてモルドヴァ史のみならず、ルーマニア史も相当量を学ばなければならないので負担が大きくなっている。また、現在では国外に移住する国民も増えているが、これらの人々についても「ルーマニア人」として理解されるような記述になりつつある。

現在ではおおむね親ルーマニア的な歴史家の立場が歴史教科書にも反映されていると言えるが、やはり国名とのズレが不自然であるという点は否めず、大統領を始め、一般市民の間での反対意見も少なくない。2012年に行われたアンケートの結果によれば、学校で教えられる歴史の科目はモルドヴァ史と称されるべきであると考えている国民は64パーセント、ルーマニア人の歴史と称されるべきであると考えている国民は16パーセント、統合史と称されるべきであると考えている国民は14パーセント、未回答は6パーセントであった[46]。

こうしたことから同国における歴史教科書は引き続き揺れ動くことであろう。今後の状況を注視つつ、別の機会に個々のテーマの記述内容に関し、より詳細な分析を行うこととしたい。

※本稿は、筆者が研究分担者として加わっている2015～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）（特設分野）（紛争研究）「バルカン諸国の歴史教育から見た紛争と和解の研究」（課題番号15KT0046）（研究代表者：跡見学園女子大学文学部人文学科石田信一教授）、及び、2018～2020年度科学研究費補助金基盤研究（C）（一般）（社会学関連）「EUの循環移民政策と移住労働者の国籍変更戦略―イタリアの東欧出身者を事例として―」（課題番号18K02011）（研究代表者：和光大学現代人間学部現代社会学科中力えり教授）による研究成果の一部である。

（本学教授）

[46] “În şcoli ar trebui să se predea Istoria Moldovei”, *Adevărul,* 15 mai 2012（https://adevarul.ro/moldova/actualitate/In-scoli-trebui-predea-istoria-moldovei-1_50aec2527c42d5a663a00835/index.html（2018年11月1日閲覧））